

愛知におけるがん免疫研究の潮流 ～故 高橋利忠先生を偲んで～

平成30年11月2日、元愛知県がんセンター総長・研究所長の高橋利忠先生がご逝去された。享年77歳であった。高橋利忠先生は名古屋大学医学部を昭和40年に卒業され、第一内科3研（日比野進教授）入局後、米国ニューヨーク・メモリアルスローンケタリング研究所に留学された。スローンケタリングではLloyd J Old博士の絶大な信頼を得て、2度にわたる米国留学を経験されることとなった。計8年間に渡った留学からの帰国後は、愛知県がんセンター研究所の第二病理学部、生物学部、免疫学部にて在籍され、がん免疫研究に長年従事された。高橋先生がライフワークとされた研究は、がん免疫療法の基礎と応用に関する研究であった。特に、ヒトメラノーマ等の腫瘍細胞に発現する表面抗原の血清学的研究や、ヒト造血器腫瘍等に対するモノクローナル抗体の作成、動物実験モデルを用いたがん抗体療法とワクチン療法の研究などが主たる研究テーマであった。1980年代後半からは、分子生物学的な研究も推進され、ヒト造血器腫瘍、特に悪性リンパ腫、そして肺がんにおける、がん遺伝子・がん抑制遺伝子の同定と機能解析研究を指導された。

その間、優れた同僚とともに数々の業績をあげられ、多くの弟子を育てられた。その研究の人脈は国内に広く及ぶ。珠玖洋（三重大、以下敬称略）、上田龍三（愛知医大）、小寺良尚（愛知医大）、川島康平（元愛知三の丸病院）、渡邊正（元愛知病院）、吉田純（元名大）らとスローンケタリングではたくさんの日本人留学生とともに研究が進められた。愛知県がんセンターでは、谷本光音（元岡山大）、坂口志文（阪大）、小幡裕一（理化学研究所）、高橋隆（愛知がん）、瀬戸加大（久留米大）、石田靖雅（奈良先端大）、そして私、関戸などが指導を受けた。他にも、高橋利忠先生の薫陶を受け、現在名古屋地区でがん研究に励んでいる現役の研究者・臨床家には高橋雅英、中村栄男、赤塚美樹（以上、名大）、飯田真介、小松弘和、森田明理（名市大）、笠井謙治、細川好孝、吉川和宏（愛知医大）、恵美宣彦、塚本徹哉、近藤征史（藤田医大）、樋田豊明、堀尾芳嗣、山本一仁、谷田部恭、葛島清隆（愛知がん）らがいる。これらの研究者がさらに多くの弟子を育ててきたので、高橋利忠先生が影響を与えた医学研究者・臨床家は多数であり、人脈はとてつもなく広い。

高橋利忠先生の指導・薫陶を受けた研究者はその後、世界の医学・医療を変える大きな発見をしていく。代表的な例を挙げれば、上田龍三らによるヒト化CCR4抗体（モガリズマブ：ポテリジオ）の開発、坂口志文による制御性T細胞（Treg）の発見、そして石田靖雅らによるPD1の同定である。PD1の発見は抗PD1抗体であるニボルマブ（オプジーボ）の開発につながり、がん免疫療法では現在、もっとも注目されている治療法であることは周知の通りである。

高橋利忠先生は、日本癌学会や日本がん免疫学会（旧・基盤的癌免疫研究会）で活躍され、2006年には中日文化賞、2007年には日本癌学会吉田富三賞、2013年には瑞宝小綬章を受賞されている。

高橋利忠先生のご冥福をお祈りしたい。

（関戸 好孝）

